

向暑の候 宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部会員の皆様にはコロナ禍の中、恙なくお過ごしのことと、衷心よりお慶びを申し上げます。

先月 21 日、全国や当県独自の緊急事態宣言は解除され、6 月中に 2 度のワクチン接種を完了した私は、漸く大手を振って「ニシタチ」へ行けるようになりました。(笑)

また東京オリンピック開幕まで後 3 週間となり、開催反対を声高に叫んでいた野党等も最近は一トーンダウンして、まるで開会式を心待ちにしているかのような雰囲気です。

さて先月も自衛隊関連行事などは全く開催されず、皆様にお知らせすることはありませんが、今月からはいよいよ 64 才以下の若年層にもワクチン接種が始まるようで、全国津々浦々に集団免疫が形成されれば、誠に堅い自衛隊の門戸開放も近いものと思われまます。

ところで前期決算で 400 億超の赤字を出した朝日新聞記事に関して、小川先生の興味深い分析が先日のメルマガで届きましたので、転載し皆様にご紹介を差し上げます。

・マスコミは軍事を戦争ごっこだと思っている

6 月 11 日の朝日新聞に、1 ページを割いて元陸上自衛隊西部方面総監・番匠幸一郎さんのインタビューが載りました。

「東シナ海、南シナ海の平和は保たれるのか。中国の空母などが展開するのに対し、米海軍が監視を強める。台湾海峡でも米中にはにらみ合う。また中国は武器の使用を含む措置を可能とする海警法を施行し、尖閣諸島周辺の緊張が高まる。日本はどうすべきか。島嶼(とうしょ)部防衛に取り組んだ番匠幸一郎元陸将に聞く」

私は番匠さんとは大変に親しい間柄で、一緒に仕事をしたこともあります。数多の自衛隊 OB の中で、世界のどこに出しても通用する数少ない軍人で、その番匠さんを引っ張り出した朝日新聞の目も、それほど狂っている訳ではないことがわかりました(笑)。

番匠さんは、「台湾有事は日本有事」との認識を示しています。また、「尖閣や台湾の危機を想定することは、日本の最大の貿易相手国、中国を仮想敵とすること。マイナスは計り知れませんが」という問いに対しては次のように明言しています。

「現代国家の標準は安全保障が存在の基本ということです。経済があるからといって妥協することがあってはなりません。主権、領土や国民の命を守ることは国の一丁目一番地であり、法の支配や自由、民主主義など決して譲れない普遍的価値と、経済のメリットとを交換することはあり得ません」

このように番匠さんの答えは明快なのですが、取材した駒野剛編集委員が後記の中で次のように述べているところに、軍事問題に関する日本のマスコミの認識の浅さを感じざるを得ません。

「一方、あくまで守りを固めるためとはいえ、こちらの防衛力を展開させることには、相手側のあらゆる警戒心を高めたり、偶発的な衝突を招いたりする懸念が伴う」

駒野さんだけではありませんが、ここに安全保障問題を扱うマスコミの一知半解ぶりが現れています。

守りを固めるためと言う一方、外国に侵攻可能な構造の軍事力を持つ国が強力な兵器を展開すれば、相手は警戒しますし緊張も高まるでしょう。しかし、自衛隊には海を渡って外国に上陸侵攻する能力は備わっていません。それは軍事力としての構造を見れば明らかです。航空自衛隊の戦闘機は北京まで飛べる航続距離だから侵略できるなどというのは、幼稚な認識です。

中国もそんな事は思ってもいません。自衛隊は日本の国境の内側で外国に手出しを躊躇わせるような防衛力を強化していくのです。それでも中国は難癖をつけるでしょうが、そんな幼稚な事をいったら世界から笑われるよと一蹴すればよいのです。駒野さんはこんな事も言っています。

「自衛隊は最後のとりでだ。その前に役割を果たすべき外交の架け橋が日中ともに脆弱(ぜいじやく)になってはいまいか」

その前にとは、なんたる言い草でしょう。防衛態勢の強化には時間がかかるのです。戦争ごっこのように簡単に考えては困ります。外交と防衛力整備は同時進行でなければなりません。

駒野さんは優秀な記者のようですが、軍事力の見方はステレオタイプで、兵器を配備すれば攻

めていくことに使われるものだと思います。これを機に認識をあらためて欲しいと思います。また、台湾や日本に警戒心を抱かせ、緊張を高めているのは中国であることも、中国が国境に配備している軍事力の攻撃能力と台湾と日本周辺での行動を通じて、ぜひ報道してもらいたいものです。以上
(小川和久)

中国の膨張政策は留まるところを知らず、チベットや新疆ウイグルは言うに及ばず香港の次は台湾、そしてその先には沖縄や或いは日本まで視程に納めているかのようです。

6月23日の「産経抄」に、中国当局による香港大衆紙「蘋果日報」創業者の黎智英氏逮捕に際して、「ペンが剣よりも強し」の古諺を演繹していましたが、これには「偉大なる統治者の下では」との条件が付くようで、要は「剣を振りかざして抵抗しても、権力者がペンでサインした令状で押さえ込める」が真意とのことでした。

私の「ペンが剣よりも強し」の認識は、「弱者が権力者の振るう剣に対して、ペン(自由な言論)で戦い勝利する」程度のものでしたからまさに目から鱗で、香港に於ける報道の自由を守ろうと立ち上がった「蘋果日報」の黎智英氏は、中国政府が昨年成立させた「国家安全維持法」を根拠に、逮捕や資産凍結許可のサインをしたペンによって新聞発行停止に追い込まれたようです。

習近平が「偉大なる統治者」かどうかは当然疑問のあるところですが、「香港の報道の自由を圧殺した中国政府のお陰で、名言が本来の意味を取り戻した」とコラムは結んでありました。

中国共産党は今月創立100周年を迎え、様々なイベントが北京を中心に繰り広げられるとの報道に、今度は一体何をしでかすのだろうと、私も大変興味津々でウォッチしているところです。

今暫く続く「With Corona」の中、皆様呉々もご自愛専一にお過ごし下さい。

令和3年7月1日

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部長 小倉和

彦